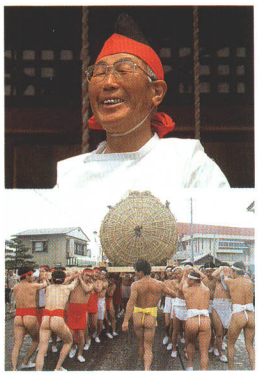


されている。

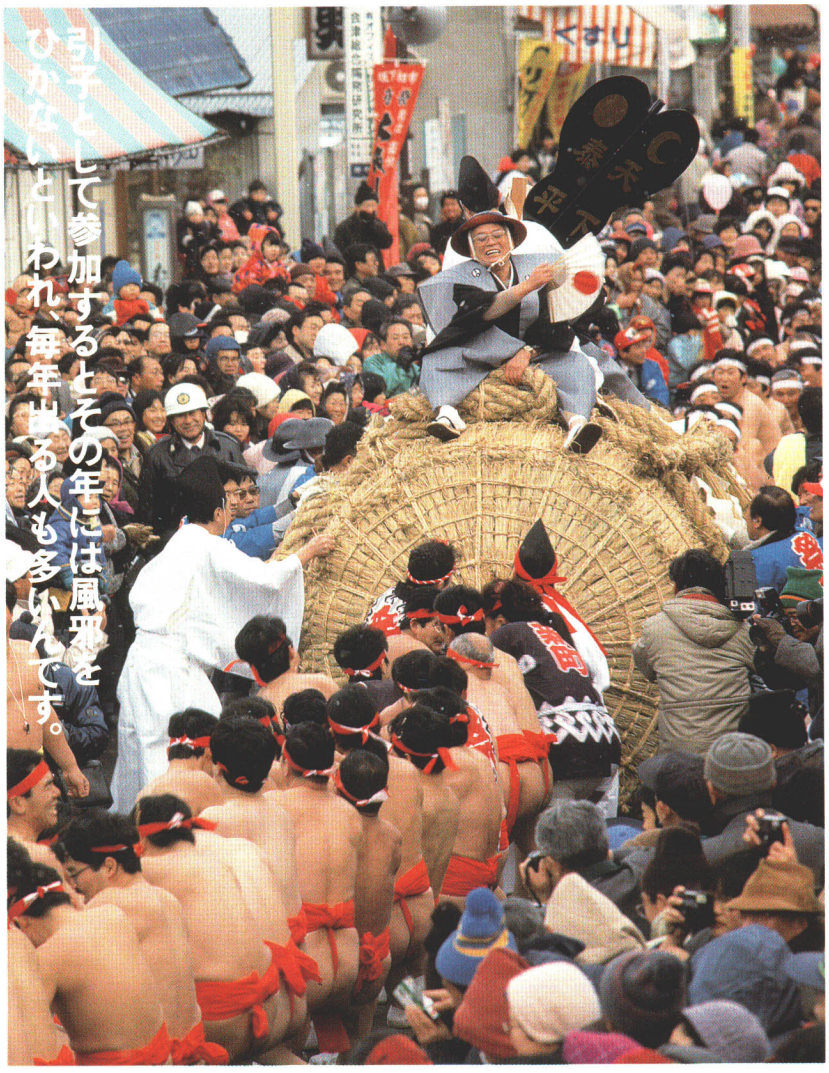
大俵引きはその後、明治維新後に起きた戊辰戦争を境に途絶え、毎年の初市も露店のみの売り出しに変わり、時代とともに徐々にすたれてしまった。

しかしその後、地元から大俵引きの復活を求める声が起こり、数々の口承・文献などの調査、研究が行われた。それらに基づき、俵引き行事の大概が解明され、ついに昭和三十一年の初市から大俵引きが復活することになった。

復活した後の俵引き行事一切の運営は、初市運営委員会の手によって行われ、現在では往時の賑いをしのぐほど盛んになったといわれ、町の正月の恒例行事となり、季節の風物詩になっている。

大俵は直径二㍍、長さ三・四㍍、重さが三㌧もあり、引子が引き合う様はまさに勇壮そのもの。毎年正月の十四日に、町役場前路上で、豪快な大俵引きや福俵まきなどが繰り広げられている。近隣からは多くの人々が集まり、初市で賑わう路上は群衆で埋め尽くされる。

「坂下で正月が来ると、すぐ大俵引き。体がそわそわして、寒さも忘れるくらいの熱気に包まれるんです。俵引きの引子として参加すると、その年内は風邪をひかないといわれ、毎年欠かさずに参加する壮者も多い。引子のいでたちは下帯に白足袋、赤か白の鉢巻。行司となると神衣をまとい手には大軍配を持ち大俵の上に乗って指揮・審判を行う。

大俵引きはまず引子が紅白に分かれ、露店を一周してから市神に参拝する。行司の挨拶、神官によるみそぎの儀式が行われる。その後、紅白に分れた引子が、行司の合図に従っていっせいに互いに大俵の太綱を激しく引き合う。

大きな声を掛け合い、息も荒々しく体に湯気を立てながら争う光景は熱気に満ちて、実に勇壮である。その熱気は周囲にいる見物客にも伝わってくる。厳寒の季節、坂下の人々は大俵と歓声、そして熱気にあふれた伝統の祭礼で新年を祝い合う。